

主宰論説47

人類生き方思想史原論—哲学と宗教と芸術と科学の歴史的流れについて—
(全面的見直しと根拠の文献挿入版)

かけがえのない地球と人類と生物の共存・共栄により、千年紀、いや一万年紀を切り開くためには、これまでの人類史で持つと考えられる哲学と宗教と芸術と科学について、相互の関連性も含めて、その歴史的流れと系譜を考えてみるのも、古の昔から、多くの人間は、生と死を見つめながら、人生を問い、生きがいと健康と寿命に思いを馳せながら、これらとただ、人は、生きる過程で、大波小波に見舞われ、ジグザグコースを歩まざるを得ない場合も多い。その際、改めて「夢歌」を奏でる重要な動機（モチベーション）となったと考えられる（パンドラの箱の最後に残っていた「希望」が、艱考えられる）。国境、宗教、時代を超えて、人類史上に燦然と輝く、【**生き方の金字塔**】ということを考えておくのも、人類がこの地球上に現れ、洞窟から抜け出して、平地で居住を始めた頃、吹き荒れる嵐などの大自然の猛威の前では、きるような状況にはなかったと思われる。もともとの大自然は、決して人間に優しいものではなく、むしろ、その立ち入も、火と道具と言葉という3大発明を駆使し、持ち前の頭脳を発揮して、大自然を、人類と共存できる半自然に変えること（火の上手な使い方、食材が豊富になり、猛獣を制御出来るようになったが、使い方を誤ると、火災などの大惨事を料確保という生活形態では、余剰生産力は、期待できず、日々の生活で手一杯であり、人生に思いを込めるとか、この世だったと思われる。農耕・牧畜（および商・工業）による定住型社会への移行とともに、余剰生産力も生まれ、「生きる」とな問いも、考えるようになっていったと言えるだろう。その過程で、先ず、哲学が生まれる。哲学というと、最初に浮か「万物の根源は水である。」と唱えたタレースや、「万物の根源は、原子である。」と唱えたデモクリトスで代表されるの組み合わせからなる」とする、自然哲学のイオニア学派らで代表される（文献1；ウィペデキア日本語版）（これらは実証性には乏しい嫌いはあるが、元素に関する先駆的な考えであったと思われる）。次いで、ソクラテス、プラトン、ア道徳哲学である（文献2：加藤信朗著、ギリシア哲学史（新版）、東京大学出版会（2024. 8））。近代に入って、デカル流れの大陸合理論（文献3： ）と、フランシス・ベーコン、トーマス・ホッブス、ジョン・ロックの流れのイギリス経典 ）から、「純粋理性批判」、「実践理性批判」、「判断力批判」で知られる、旧プロシアのケーニヒスブルグ出身のり、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル によって完成されるドイツの観念論（文献6： ）を経て、ニーチェ、キエに到るようだ（文献7： 世界哲学史 筑波書房 ）。少し毛色が違うが、アメリカでは、チャールズ・サンダース・パデューイの実証と行動に重きを置く実用主義（プラグマチズム）という独特の哲学の流れがあるようである（文献8： 「版 ）。日本では、「諸学の基礎は、哲学にあり。」と言った、井上哲治郎（円了）、「善の研究」で知られる西田幾多良の哲学の影響もあると言われているようである（文献9：岩波書店 ）、「人生論ノート」を著した三木 清などの流れが主要テーマとした論説も、古今東西いろいろなものがあり、宗教のテーマにもなっているが、小説の中で論じたのは、ロ後、ほとんど誰もいないと思われるようである（文献10： 「罪と罰」 1866年）。宗教については、分派も含めて、多ころもあり、異論も多いと思われるが、避けて通れないと思われるので、あえて、考えを述べてみたい。ユダヤ教、キリいずれも、中東の砂漠地帯を起源とする“砂漠の民”の一神教のようである。また、もう一つの大きな宗教である仏陀の教えであるようだ。昔のヘレニズム時代のバクトリアの故地のガンダーラ地方で起こったクシャナ朝のカニシカ王時代をタクラマカン砂漠のオアシス経由で北伝し、アジアの各地に広まったようである。もう一つの自力更生を特徴とする小乗ったようである。別に、中国固有の無為自然を説く道教、インド固有のヒンズー教、旧ペルシア固有の二神論に立つ拝火路』（文春文庫）で、日本までの伝来過程を論じているようである（文献11： 北九州市松本清張記念博物館）、世界その系譜である。）などが上げられる。農耕社会や漁撈社会、森林社会や山岳および海洋社会では、大分は、色々な自ミズム)の考えを基礎とする多神教の方が多いようである。北欧神話では、オーディンを主神とする多神教だし、ギリシ日本の神道も、天照大神を主神とする多神教である。どちらも、信仰対象が違うだけで、人間の思考を超えたものの存在うである。芸術の系譜と流れについても、述べてみたい。黎明期の頃から、人間は、日々の生活の合間に、絵などを描い術として、残そうとしてきた。古くは、アルタミラの洞窟やラスコーの洞窟の動物の壁画が知られている。また、自然石る原始彫刻がある。ただ、一口に芸術といっても、絵画、彫刻、陶芸、建築などの造形美に関するアポロンのものもある聴覚に由来する陶酔美に関するディオニソスのものもある。能・狂言、歌舞伎、踊りなどの中間的なものもある。世界多い。ただ、世界史を眺めると。「美の巨人達」も、西洋芸術と東洋芸術に大別されるようである。絵画や彫刻は、偶像築芸術を除いては、ほとんど目立った名作が見られないイスラム圏を除き、宗教的な教えを目に見えるようにして、そ協力の形で発達したようである。キリスト教教会の天地創造のフレスコ絵や聖母マリア像や、仏教における仏陀像や観音ランジェロのダビデ像や、シルクロードの敦煌、雲崗における石窟仏像が上げられる。ルネッサンス時期では、宗教から絵画や彫刻が花開いた。ラッファエロ、ミケランジェロのキリスト教会の円天井に描かれた、天地創造に関わる天使らの後の晩餐やモナリザ像が上げられる。建築では、ロマネスク、バロック、ゴシック様式の流れがある。建造物としての芸要があるようである。ヨーロッパ各地のいろいろな宮殿、教会、城郭に反映され、多様性に富んでいるようである。またで、科学技術とひとくくりにした方が良いのかもしれないが、本来は、自然界の諸々の現象や仕組みに対する法則性、あ対する知的好奇心の対象として、科学があるので、技術とは、やはり別にして考えるべきものと思われるので、科学とい科学的知見をもとにして、創意・工夫により、技術的革新を目指し、人類に有用なものや技術を提供し、生活等を便利にだ融合するだけでなく、そのきしみ等の改善を図るという面もあるようである）についても、新たな視点から、少し、考レイに始まる近代科学（文献9：）は、いろいろな流れを経由しながら、現代科学に至るようだ(科学と文学の接点という

が、水ガラスが、鉄、コバルト、ニッケルなどの鉄属イオンを加えると、青色、エメラルド色、瑠璃色などの、美しい沈う逸話が、残っているようである（文献 12： マイヤー「水ガラス」奥田 進訳、コロナ社）、1950、ケミカル・ガーデンも、自然科学だけでなく、人文科学、社会科学もあり、その裾野は、かなり広いようだ。欧米型の科学は、哲学や宗教からの好奇心を満足させ、この世の法則性を解き明かし、物質的な豊かさと日常生活の利便さを提供し、人に幸せをもたらした大量廃棄型の物質文明と生産体系に支えられ、人類に未曾有の繁栄をもたらした功績は、大なるものがあるようだ。しか問題、廃棄物問題、人工知能（AI）問題など、いろいろな問題が露呈し、持続可能な開発目標（SDGs）への実効性のあるっているようだ。連携、協奏、融合等が唱えられることもあるが、哲学と宗教と芸術と科学は、時折相互作用を通じて相互に影響を受けながらも、平行して進むものかもしれない。

自由短歌：

山川海恵みと猛威相半ばされどもなつかしゆりかごのもと

自由短歌

人たるに燦然と残った文化遺産火道具言葉が支えし人類史

令和 7 年 5 月 12 日初稿

令和 7 年 5 月 13 日脱稿

令和 7 年 5 月 1 7 日再脱稿

令和 7 年 5 月 2 1 日再修正

令和 7 年 7 月 11 日大幅見直し

令和 7 年 7 月 20 日 文献挿入